コレンテ　vol. 44　n.391　giugno 2023

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 43

＊リヴィエラから望むコルシカ＊

堤　康徳

ヴェネツィアの商人マルコ・ポーロがフビライ汗に語る、架空の都市の数々。『見えない都市』で語られたどこにも実在しない町のたたずまいはしかし、しばしばヴェネツィアやサンレモの面影を映し出す。「都市と欲望 3」と題された、書き出しがとりわけ印象的な一篇を読んでみよう。

> デスピーナに行くには、ふたつの方法があります。船か、あるいはラクダに乗って。町は、陸から来る者と、海から来る者に、異なる様相を見せます。[1]

陸路と海路では、デスピーナの見え方はどのように異なるのか。マルコ・ポーロの説明によれば、ラクダ引きは、高原の地平線にその町が現れるとき、「自らを砂漠から連れ出す貨物船のことを思い」、それとは対照的に、町を沖合から眺める船乗りは、「海岸を覆う靄のなかに、ラクダのこぶの形を見分ける」という。

デスピーナには、サンレモの光景が反映されているようだ。サンレモ港が映る古い写真を見ると、たしかにラクダのこぶのような丘が見える。この事実を教えてくれたのは、カルヴィーノ生誕 100 年に合わせて出版された『イタロ・カルヴィーノ、サンレモとその周辺――ある文学紀行（1923-1985）』という本である（編著者のふたりは、いずれも、ジェノヴァ大学で教鞭をとる研究者）。[2]

温暖な気候に恵まれ、美しい海と山に囲まれたリグーリア州サンレモは、農学者だった父マリオの出身地であり、イタロが少年期を過ごした町である。カルヴィーノ一家の住んだメリディアーニ邸や、イタロの通った小学校や映画館だけでなく、彼の作品の舞台となった場所について、豊富な写真とともに解説された本書の頁をめくっていると、この一書を携えてサンレモをじかに歩き、カルヴィーノの足跡をたどってみたくなる。

カルヴィーノの第一短篇集『最後に鴉がやってくる』所収の『荒れ地の男』も、やはりサンレモが舞台である。この短篇は、まるでシュルレアリスムの絵画のような描写で始まる。

> 早朝にはコルシカ島が見える。その風貌はまるで山をいくつも積んだ船が水平線のうえで宙づりになっているようだ。（中略）朝、コルシカ島が見えるのは、空気が澄んでいて風の凪ぐときで、雨が降らないという徴だ。[3]

『荒れ地の男』には、父と息子の兎狩りの一日、そのかけがえのない時間が描かれている。空気が澄んで風の凪いだ早朝、コルシカが見えるのは、サンレモのコッラ・ベッラと呼ばれる小高い荒地からである。サンレモからコルシカ島が望めるという事実にまず驚かされるが、この描写からは、

地中海の神話的な風景が立ち上がってくるようだ。

最近、ある幸運な出会いによって、前回本稿で取り上げた詩人、エウジェニオ・モンターレの作品にも、リヴィエラから見えるコルシカに触れた詩句があることを知った。

京都大学で教鞭をとるモンターレ研究者、イーダ・ドゥレットさんから新年早々に頂いたモンターレのアンソロジーのなかで、偶然にもその詩を見つけたのだった。詩人と同じくジェノヴァ出身のイーダさん自身が、モンターレ最晩年の詩集『その他の韻文』(1980 年刊)から 10 篇を選び、周到な註を付したアンソロジーである。

その詩句は、「神々に愛されて」(*Cara agli Dei*)と題された一篇の出だしの一節のなかにある。

真珠よりも澄んだ日に
わが家のバルコニーから見えた
コルシカは空に宙づりなって現れた。
まるで真っぷたつね、とあなたは言った
人の命によくあるように。

Vista dal nostro balcone
In un giorno più d'una perla
La Corsica appariva sospesa in aria.
È dimezzata dicesti come spesso
la vita umana. [4]

1978 年に書かれたこの詩句は、先に引用したカルヴィーノの文章と共鳴しているように思えてならない。イーダさんの註を頼りに作品の読解を試みよう。1 行目のバルコニーとは、モンテロッソにあった詩人の別荘のバルコニーだという。東リヴィエラのモンテロッソ(海沿いの景勝地として知られるチンクエ・テッレの 5 つの村のひとつ)と、西リヴィエラのサンレモは、ジェノヴァをはさんで対照的な位置関係にあるが、コルシカ島までの距離はだいたい同じだろうか。空気が澄んでいれば、サンレモからもモンテロッソからも、きっとコルシカの島影が見えるときがあるのだろう。

コルシカ島がモンターレの詩句のなかに現れるのはこれが最初ではなく、第一詩集『烏賊の骨』(1925 年刊)所収の「海に臨む家」(*Casa sul mare*)に、めったに出現しないその姿がこう表現されている。

海が静かに凪いでも
空気のなかでさまよう島々のあいだに
起伏に富むコルシカやカプライアは
まれにしか姿を見せない。

ed è raro che appaia
nella bonaccia muta
tra l'isole dell'aria migrabonde
la Corsica dorsuta o la Capraia. [5]

リヴィエラのはるかかなたに、空と海のあいだで宙づりにされたかのように現れるコルシカは、奇蹟的な顕現という意味において、前回紹介した詩「レモン」における、冬の日に「半開きの門から、中庭の木々のあいだに」現れる「黄金の喇叭」のような果実とも重なり合っている。

トスカーナ群島のひとつカプライアは、『神曲』「地獄篇」第 33 歌のピサを呪詛する詩句「動け、カプライアとゴルゴーナよ、アルノの河口をふさいでしまえ」(muovasi la Capraia e la Gorgona, e faccian siepe ad Arno in su la foce)(vv. 82-83)をも想起させる。

「神々に愛されて」は、モンターレのミューズのひとりで、50 代半ばで死去したアンネッタことアンナ・デリ・ウベルティ(Anna degli Uberti, 1904-59)の思い出とともにある。「あなたは言った」の「あなた」はアンネッタである。レオパルディが詩篇「愛と死」(*Amor e Morte*)のエピグラフに掲げた、古代ギリシアの劇作家メナンドロスの格言「天に愛される者は若くして死ぬ」(Muor giovane colui ch'al cielo è caro)にあるとおり、神に愛された者が夭折するとは古来言われるところである。また、まだ若い子や友を失った者が、思いがけず長生きしてしまうことも、人間にふりかかる皮肉な運命のひとつであろう。モンターレはアンネッタを失ったとき還暦を過ぎ、この詩を書いたときは傘寿を超えていた。

下半分が切断されたかのように海上に浮かぶ

コルシカ、その島影と結びついたアンネッタの思い出は、ルソーの言葉を介して、老いをめぐる省察へと詩人を導く。冒頭に続く部分をすべて引用しよう。

「老人が近づいてきた。彼はもう 50 歳」/私はルソーを引用して言った、わかったもんじゃないさ/人の命がどれだけ続くかなんて。私は当時知らなかった/あなたがさっさと問題を解決するとは/追っ払ってしまうなんて人生の後半を:「年寄なんか！」って。/私にはまだわからない自分が神々に愛されているか疎まれているか/これらの仮面のどれが正しく、どれが誤りなのか。/彼はもう 50 歳！ この「もう」にほのめかされた意味に/私の頭はおかしくなりそう。

Le vieillard s'approcha, il avait
bien cinquante ans
dissi citando Rousseau, non si saprà mai
quanto deve durare una vita. Non sapevo
allora che tu per conto tuo
avresti risolto il problema
scacciandone una parte: "un barba!".
Non so ancora se fui caro o discaro agli Dei
e quale di queste Maschere abbia ragione o
torto.
Il avait bien 50 ans! Quello ch'è sottinteso
in quel bien potrebbe anche farmi
impazzire. [6]

ジャン・ジャック・ルソーの著作には、モンターレの引用した文章は見当たらないという。誤解の原因は、1977 年に『エスプレッソ』誌に発表された小説家アルベルト・モラヴィアの「老年について」(De senectute)と題されたインタビュー記事を、モンターレが参照したことにある。キケロからマンゾーニまで、古典作家の老年論を検証したモラヴィアは、かつての 50 歳老人説の一例としてルソーの次の文章を挙げていた。「ルソーに恐るべき文章があります。『50 歳の老人が近づいてきた』(S'approcha un vieillard de cinquante ans)というものです」。ただしモンターレは、この引用に独自に「もう」(bien)を加えて、50 という年齢を強調したのではあったが。[7]

---

[1] Italo Calvino, *Le città invisibile*, Milano, Mondadori, 2011, p. 17.
[2] (*Italo Calvino, Sanremo e dintorni. Un itinerario letterario(1923-1985)*, a cura di Laura Guglielmi e Veronica Pesce, Palermo, il Palindromo,2022, pp. 42-43.
[3] イタロ・カルヴィーノ『最後に鴉がやってくる』(関口英子訳、国書刊行会、2018 年、p. 51)
[4] Eugenio Montale, *Antologia da Altri versi,* a cura di Ida Duretto, Pisa, ETS, 2017, P. 61.
[5] Eugenio Montale, *Tutte le poesie*, a cura di Giorgio Zampa, Milano, Mondadori, 1984, p. 93.
[6] Eugenio Montale, *Antologia da Altri versi,* op. cit., p. 61.
[7] *Ibid.*, pp. 64—65.

（上智大学准教授）

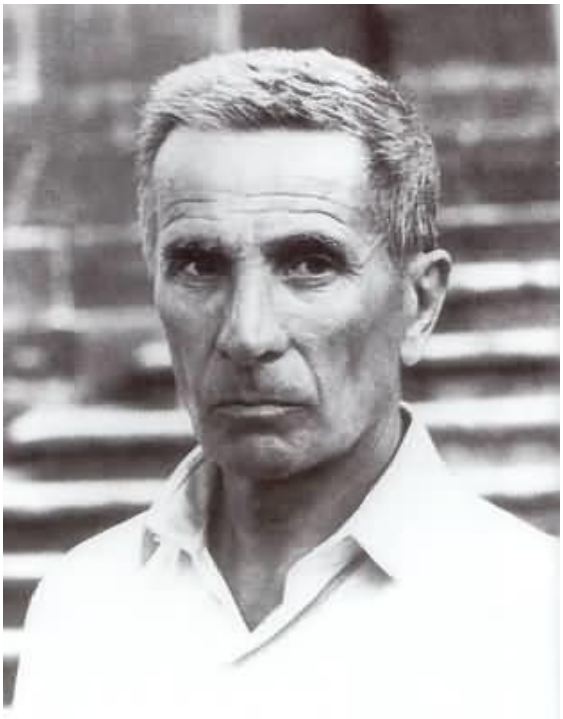
素晴らしき自転車レース 41

『ブッツァーティのジロ帯同記』

谷口　和久

今年はじめに往年のレースを題材にした翻訳書が出版された。タイトルは『ブッツァーティのジロ帯同記』(原題:*Dino Buzzati al Giro d'Italia*)。タイトルにあるブッツァーティとは、イタリアの作家ディーノ・ブッツァーティである。

ディーノ・ブッツァーティは 1906 年イタリア北部ヴェネト州ベッルーノに生まれた。ここはドロミテ山塊を間近にのぞむところで、ブッツァーティは幼少から登山に親しんだという。そのためか写真で見る彼は、一般的な文筆家のイメージとはかけ離れた、精悍な面立ちだ。



【ディーノ・ブッツァーティ】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Dino_Buzzati

ミラノ大学に学んだのち、新聞社コッリエーレ・デッラ・セーラに入る。特派員、記者、コラムニストなどとして終生勤め上げた。並行して創作活動に入り、第二次大戦直前の 1940 年に発表した『タタール人の砂漠』をはじめ、多くの作品を手掛けた。

『タタール人の砂漠』に代表されるように、彼の作品には不思議な空気がただよっていて、「イタリアのカフカ」などと評されている。ストーリーは不可思議だが語り口が平易で文章力もあるので、ついつい読み進めてしまい、ますますその不条理の蟻地獄にはまり込んで足をからめとられてしまう、そんな魅力がある作家だ。

60 年代の初めに来日し京都も訪れたそうだが、その際も名所旧跡には目もくれず、幽霊の出るお寺はないかと言って案内役を困らせたり、路傍の占い師に手相を占ってもらったりと、作品同様、不思議な人だったようだ。

ジロ帯同記は、1949 年のジロ・ディ・イタリアの新聞記事をのちに編纂したものだ。ブッツァーティは勤め先のコッリエーレ・デッラ・セーラの特派員として約 20 日間に及ぶレースに帯同し、毎日レースが終わると翌朝発行される新聞のために記事をまとめた。前書きによると口述したとあるので、おそらく電話でミラノの編集部に伝えていたのだろう。もちろん彼自身は自転車ではなく自動車で移動していたわけだが、それでも毎日 200～300km もの距離を車に揺られ疲れはてた状態で原稿を書き電話口で読み上げる労力は、現代の私たちからは想像もできない苦労だったのではなかろうか。

そしてこれもまた彼の他の作品同様、なんとも不可思議なルポルタージュである。新聞記事であれば、レースの展開や結果、選手のインタビューなどが普通書かれているものだろうが、そんなありきたりの内容はほぼ皆無。それどころか、大戦の激戦地を通過するときは戦死者の亡霊がでてきたり、レースの騒音に朝寝をジャマされてボヤいているおっさんがでてきたり(どちらも絶対インタビューなぞしていないはず)、虚実入り乱れて、おカタい自転車ファンが読めば放り投げそうな中味だ。

この年のジロは自転車レース史に残る大会であった。自転車史上最大のライバル、ジーノ・バ

ルタリとファウスト・コッピの世代交代となったレースだからだ。

前年のツール・ド・フランスも、レース史のみならずイタリア近代史にも影響を及ぼした大会であった。共産党書記長トリアッティの暗殺未遂事件が起き、それに反応した労働者たちが各地でデモやストを起こし、イタリアは大混乱。米ソの冷戦もあいまって、あわや内戦かというところまで緊張が高まっていた。そのような状況下、バルタリのツール優勝により緊張が解け、国情は安定化に向かったという。（詳細はよろしければ2022年10月発行の本誌383号をご一読ください）。

ブッツァーティはそれまで自転車レースを生で見たことがなかったというが、このバルタリの活躍がジロを追いかけるきっかけとなったに違いないだろう。

【1949年ジロを走るファウスト・コッピ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Giro_d%27Italia_1949

それではページを繰りながら時系列でレースを追ってみよう。

第一章はいきなり船の中から始まる。第1ステージはシチリアからスタートするので、選手たちは船で夜間移動しているのだ。当然ながら選手たちは睡眠中。ブッツァーティは頭の中に潜り込んで、夢の様子をかいま見る。

無名の若者が強豪たちを相手にアタックをかける。どんどんどんどん引き離す。沿道からの声援が車輪を後押しする。夢の中ではいくら漕いでも息も上がらずノドも乾かない。無敵だ。大歓声の中、ゴールラインを切る。拍手とファンファーレ、花束とキスの嵐。zzz, zzz...

ジェノヴァから船に乗ってパレルモに向かう選手たちは赤シャツ隊に擬せられる。さかのぼること約90年前の1860年、ガリバルディひきいる赤シャツ隊が同じ航路でパレルモに上陸し、イタリア統一の足がかりとした。ブッツァーティは、戦争によって荒れ果て分断されたイタリアを統一する平和の赤シャツ隊として、自転車選手たちを描く。選手たちを迎える沿道の人々は口々にバルタリ、コッピの名を叫び、その顔には希望の光が輝いている。

第五章でようやく走っている選手が登場する。生でレースを見るのは初めてというブッツァーティだが、集団から逃げを打ち苦痛にゆがむ選手の描写は、自身の体験のようにリアルだ。

> 太ももは鉛になり、燃えるような砂がひざ関節に染み込む。ペダルは重いぬかるみにはまったようだ。

かと思えば、カターニアでは、レースの物音に朝寝を邪魔されてボヤく中年紳士が描かれる。

> 「もうこの町ではクリスチャンの人間が寝ている権利すらなくなってしまったのか？この地獄の騒音はなんだ？」

若いころは多くの女性に跪かれたという美男アントニオ。すでに朝10時半を過ぎているのを棚に上げて、クリスチャンの権利なぞ主張している。名優マストロヤンニにでもやらせたらピッタリのはまり役だ。

ブッツァーティのジロ帯同記は、こんな調子でレースと直接関係のない場面が多々描かれている。ある意味カオスだが、楽しいカオスだ。まるでフェリーニの映画でも見ているようだ。

第八章のタイトルは「コッピもバルタリもエボリで止まらない」。言うまでもなくカルロ・レーヴィの『キリストはエボリで止まりぬ』からパクった（？）タイトルだ。この章はコッピとバルタリにあてたメッセージ形式になっている。

君たち（筆者注:コッピとバルタリ）は、エボリまでしか来なかったキリストが、決して足を踏み入れなかったはずの寂しい谷間を走り抜けてきた。しかし森の脇の巨礫の上で、険しい道の土手の上で、男たちも女たちも君たちを待っていたのだ。

日頃は貧困と疫病におびえて暗い顔ですごす南部の農民たちが、母国の英雄コッピとバルタリを一目見ようと目を輝かせて沿道に詰めかけている。しかしながら二人は体力を温存するために集団の中に埋もれて、沿道からはほとんど目にすることができない。先頭を逃げるか集団の先鋒を走ってくれたら観衆たちも喜んだのだが、というブッツァーティなりの愛情あふれるメッセージだ。

ブッツァーティの視点は、貧しい農民たちだけでなく、忘れ去られようとしている人にも向けられる。ナポリからローマへのステージで、モンテ・カッシーノの近くを通過した。ベネディクト会の修道院が建つこの小さな山で激戦が繰り広げられたのはわずか 5 年前。イタリア兵だけでなくアメリカ兵、ドイツ兵、がれきに埋もれた亡き人たちとブッツァーティとの不思議な会話が繰り広げられる。彼らは現世の祝祭から永遠に切り離された存在だ。

フレンチアルプスの峠を越える大舞台でついに両雄の決戦の火ぶたが切られる。二人の戦いはホメーロスの『イーリアス』に例えられる。コッピがアキレウス、バルタリがヘクトールだ。

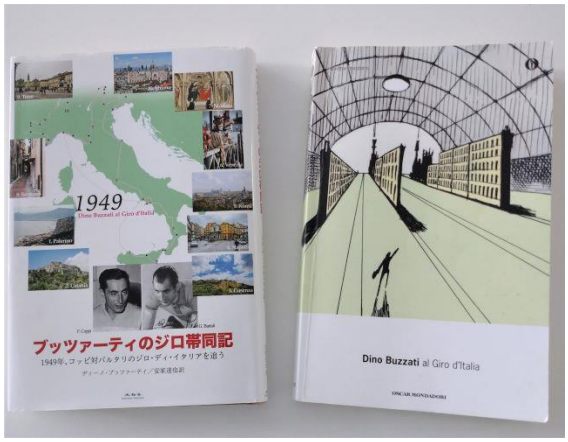
ゴール後、敗れたバルタリの口元にかすかな笑みが浮かんだのをブッツァーティは見逃さない。いつも不機嫌でしかめっ面のバルタリの笑顔に、真の終焉を見て取る。

突然、知らない人々の拍手喝采や歓呼の声が嬉しくなったのか？年月の重みはそれほどまでに重いものなのか？君はついに諦めるのか？

最終章でブッツァーティはジロを振り返って、自転車レースは労多くして益少ないロマンティシズムの拠り所であり、おとぎ話だという。

その次の年もまた、いつまでもずっと春ごとに、おとぎ話は続いていく。誰かまともな人が、こんなことを続けるのは馬鹿げていると言い出すまで。

幸か不幸か「まともな人」は 70 年たった現在もまだ現れないようで、これを記している今も「自転車でイタリアを一周するような奇妙で馬鹿げたこと」が行われ、人々を夢中にし続けている。



[参考文献]
『ブッツァーティのジロ帯同記』（ディーノ・ブッツァーティ著,安家達也訳,未知谷, 2023）
『タタール人の砂漠』（ディーノ・ブッツァーティ著,脇功訳,松籟社, 1992）
『七人の使者』（ディーノ・ブッツァーティ著, 脇功訳,河出書房新社, 1974）
『階段の悪夢』（ディーノ・ブッツァーティ著,千種堅訳,図書新聞, 1992）
『俺たちはみんな神さまだった』（ベンヨ・マソ著,安家達也訳,未知谷, 2017）
『キリストはエボリに止りぬ』（カルロ・レーヴィ著,清水三郎治訳,岩波書店,1953）
Dino Buzzati, *Dino Buzzati al Giro d'Italia*, Mondadori, 1981

（当館スタッフ）

編集・発行 /（公財） 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL:(075)761-4356/FAX:(075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/